

《タツカルー部の禍》のターリーフで知られる部族 間内訌について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平野, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21642

《タッカル一部の禍》のターリーフで知られる部族間内訌について

平野 豊

I. はじめに

ペルシア語史料においてよく見られる文芸技法の一つに、「ターリーフ (tārīkh)」と呼ばれるものがある。これは、ある重要事をごく端的な語句で表現すると同時に、その語句を構成するアラビア文字一つ一つが帯びている数値 (abjad) の合計がちょうどヒジュラ暦での当該年になるようにする、という大変手の込んだ言葉遊びである。これらは主に、当時無数に存在した詩人たちによって創作されたもので、特に出来栄の良いターリーフは叙述史料にも記載された。その多くは要人の生没年や大事件の発生年の詩的表現の域を出るものではないが、中にはそのまま事件の正式名として採用されている傑作もある。

937/1531 年に発生した大アミール＝チューハ・ソルターン・タッカルー Chūha Soltān-e Takkalū の暗殺、及び、その余波として勃発した部族間内訌の顛末を表現した《タッカル一部の禍 (937)》(āfat-e Takkalū) のターリーフ⁽¹⁾などは、その好例の一つである。この事件はシャー・タフマースプ I 世 Shāh Tahmāsp I (サファヴィー朝第 2 代君主：在位 1524-76 年) がまだ未成年の頃、すなわち、大アミールによる代理統治期の只中に発生したものである。通説では、この代理統治は 940/1533 年まで続くとされているが⁽²⁾、タフマースプ I 世による実権獲得時期はもう少し早かったのではないかと考える筆者のような者にとっては、考察対象として極めて興味深い事件でもある。先行研究としては Sūmer 氏の著作などが挙げられるが、この事件を専門的に扱った研究ではないためか、必ずしも事件の全貌を描写しきれてはいない⁽³⁾。また、事実関係の誤認が多い上、明確な論拠のない個人的見解も目立つ。史料の出版状況が飛躍的に向上した現在、既に再検討の時期に来ていることは明らかといえよう。

情報源についていえば、16 世紀サファヴィー朝史研究のための基本史料の多くが、《タッカル一部の禍》のターリーフと共に、この事件についてかなり詳しい記事を残している ([ShT], [TA], [Javāher], [AT], [JA], [KhT], [TQ])。とりわけ [TA] は、一事件としては最も多くの紙幅を割いて詳述しており、事件の全体像を再現するにあたってはこれが第一の典拠となる。逆に、信頼できる史料として知られる [IN] には、なぜかこのターリーフは記されておらず、有益な情報も意外に少ないようである。このように、各史料の性格の違いにより、それぞれの記述内容には不一致な点も少なくないが、網羅的に情報を集め、相互に比較検討するという基本的な手続きを踏めば、この事件の全体像はかなり明瞭な形で見えてくる。

本稿は、重要事件でありながら必ずしも正しく認識されてこなかった《タッカルー部の禍》の具体相を、できるだけ分かりやすい形でまとめることを目標としたい。

なお、本稿で利用する基本史料とその略号については以下の通りである。

〈ペルシア語年代記〉

【JA】: Qāzī Aḥmad-e Ghaffārī-ye Qazvīnī, *Tārīkh-e Jahān-ārā*, Ḥasan Narāqī (ed.), Tehrān, 1343AHS.

【TA】: 'Abdī Beyg-e Shīrāzī, *Takmelat al-Akḥbār*, 'Abdol-Ḥoseyn Navā'ī (ed.), Tehrān, 1369AHS.

【AT】: Ḥasan Beyg-e Rūmlū, *Aḥsan al-Tavārīkh*, 'Abdol-Ḥoseyn Navā'ī (ed.), Tehrān, 1357AHS.

【KhT】: Qāzī Aḥmad-e Qomī, *Kholāṣat al-Tavārīkh*, vol.1, Īraj Afshār (ed.), Tehrān, 1359AHS.

〈その他のペルシア語史料〉

【ZHS】: Amīr Maḥmūd-e Khwāndamīr, *Tārīkh-e Shāh Esmā'īl va Shāh Ṭahmāsb-e Ṣafavī* (*Zeyl-e Tārīkh-e Ḥabīb al-Siyar*), Moḥammad 'Alī Jarrāhī (ed.), Tehrān, 1370AHS.

【ShT】: Shāh Ṭahmāsb-e Ṣafavī *Tazkere-ye Shāh Ṭahmāsb*, Amr-ollāh Ṣafavī (ed.), Tehrān, 1363AHS (rep.).

【IN】: Khūrshāh b. Qobād al-Ḥoseynī, *Tārīkh-e Ilchī-ye Nezāmshāh*, Moḥammad Rezā Naṣīrī & Koichi Haneda (ed.), Tehrān, 1379AHS.

【Javāher】: Būdāq-e Monshī-ye Qazvīnī, *Javāher al-Akḥbār*, Moḥsen Bahrām-nezhād (ed.), Tehrān, 1378AHS.

【TQ】: Anonymous, *Tārīkh-e Qezelbāshān*, Mīr Hāshem Moḥaddeth (ed.), Tehrān, 1361AHS.

II. 時代背景

《タッカルー部の禍》の時代背景として特に重要と思われるのは、次の二点である。一つは、1531年当時のタッカルー部⁽⁴⁾の突出した勢力拡大とその状況に対する他部族の反感。もう一つは、サーム・ミールザー Sām Mīrzā とシャームルー部との強い結び付きである。

まず、タッカルー部の勢力拡大については、同部族出身のチューハ・ソルターン⁽⁵⁾が大アミールに就任した1527年7月に始まる。その当時、シャー・タフマースブはまだ13歳で、内乱が頻発する国内情勢から、政治の実権は武官最高位である大アミールの手中にあった。その点は前任者ディーヴ・ソルターン・ルームルー Dīv Soltān-e Rūmlū も同様だったのだが、チューハ・ソルターンと前任者との決定的な違いは、地方州の総督職を一族出身者で固めようとする意図が極めて明確だったという点にある。

実例を挙げると、①1529年6月にバグダード知事に任じられたモハンマド・ハーン・シャラフ

オッディーンオグル *Mohammad Khān-e-Sharaf al-Dīn-oghlu* (前ガズヴィーン知事)、②1530年夏にアゼルバイジャン州の総督 (=地方州の大アミール) に任じられたオラーマ・ソルターン *Olāma Soltān*、③同年10月にヘラート知事に任じられたガズィー・ハーン *Ghāzī Khān* (前マングリー、コルフル知事) の三名はいずれもタッカルー部に所属し、しかも、全員がチューハの従者出身という経歴を持っていた (①【TA】64, 【TQ】28, ②【IN】112, ③【TA】66) ⁽⁶⁾。地方都市の知事・州総督は、赴任地を事実上の封土とする権利を有していた。ヘラート知事はホラーサーン州総督を、バグダード知事はエラーゲ・アラブ州総督を兼務するのが実態であったから、アゼルバイジャン州も含め、サファヴィー朝の三大地方州はタッカルー部によって占有されていたことになる。

このような状況に対し、他部族は当然反感を抱いてはいたものの、権力の絶頂にあったチューハ・ソルターンにより、その言動はほとんど封殺されていた。だが、ホセイン・ハーン・シャームルー *Hoseyn Khān-e Shāmlū* を部族長とするシャームルー部だけは、チューハの権威に屈するかどうか未知名な面があった。というのは、彼らにはサファヴィー王家との結び付きの強さという点で、タッカルー部を遥かに上回る側面があったからである。

まず、ホセイン・ハーンには、母系においてシャー・タフマースプと従兄弟の関係にあるという血統の良さがあった。さらに、彼はタフマースプの異母弟王子であるサム・ミールザーの師傅 (*lale, atābek*) でもあった。この王子は、先王エスマーイール I 世の治世末期からおよそ8年間、ホラーサーン州の中心都市ヘラートの知事を務めていた。ただ、サムはタフマースプよりもさらに3歳も年少だったため、知事職の実務面は師傅であるホセイン・ハーンが代行していた。彼はまた、娘の一人をサムに嫁がせるなど、その絆をさらに強めていた (【ZHS】163, 【KhT】240)。

そのような事情で、ホラーサーン州は長らくシャームルー部の封土だった訳だが、1530年に東方から侵攻してきたウズベク軍によってヘラートを占領されたことで状況は一変する。サムとホセイン・ハーンは、彼らによってホラーサーンを追われてしまったのである。これに対して、サファヴィー朝宮廷軍は同年夏にホラーサーン遠征を実施し、再び当地を奪還した。ガズィー・ハーン・タッカルーがヘラート知事だったことは既に述べたが、それはこの遠征の後、タフマースプの実弟であるバフラーム・ミールザー *Bahrām Mirzā* の師傅兼任の形で委ねられたものだった。

一方、サム・ミールザーとホセイン・ハーンはファールス州のシーラーズに避難していた。許可なく任地を離れることは重大な背信行為だった上、長らく中央政府から距離を置いた存在だっただけに、彼らに対しては謀反の疑惑さえかけられた。そのため、ホセイン・ハーンは越冬先のシーラーズから大アミールであるチューハ・ソルターンの所に使節を派遣するなどして事情を

説明した。その結果、サームを伴って宮廷に戻りさえすれば罪は問われないということで話がまとまったのだった。ホセイン・ハーンも、ホラーサーン州を失うことについては止むを得ないと思っていたであろう。だが、王家との繋がりの象徴的存在だったサーム・ミールザーを手放す事だけは考えられなかった。《タッカル一部の禍》とは、そういったホセイン・ハーン的心情について、チューハ側の理解が充分でなかったために発生した事件とあってよい。以上のことを踏まえた上で、事件の具体的展開についての説明に入る。

III. 事件前半

(1) サームとホセイン・ハーンが行宮到着

1531年初夏、サファヴィー朝の移動宮廷は、前年度の宮廷冬営地エスファハーンに程近いギヤンドマンの牧地にて夏営中であった。その地にサームとホセイン・ハーンの一団が到着したのは、6月17日（ヒジュラ暦937年ズー・アルカーダ（zi-qa'de）月2日）の出来事だった。チューハ・ソルターンをはじめ、行宮に居合わせた人々は総出で彼らを出迎えた（【TA】67, 【IN】109）⁽⁷⁾。

アミールたち間で既に話については、サームは自らの処遇についてかなり心配していたらしい。到着するや、すぐに下馬してタフマースブの許に駆け寄り、謁見の場に至るまでに何度も平伏を繰り返す、自らの非礼を兄王に詫びたという。タフマースブはこの謙虚さに大いに満足して彼らを赦し、さっそく歓迎の宴が開かれた。チューハの方もホセイン・ハーンを「息子」(farzand)と呼ぶなど上機嫌で、翌日は自分の天幕で歓待したいなどと言っていた（【TA】67）。

だが、日暮れ時に至って事態は急変する。宴が終わり、ホセイン・ハーンに退去の許しが与えられた時、彼と共にサーム・ミールザーが戻ることは許可されなかった。タフマースブがサームをハレム (haram-e 'aliyye) の中に連れて行ったのである。その理由については、母后タージルー・ベイゴム Tājilū Beygom や姉妹たち (hamshīre-hā) にも会わせて喜ばせようとの考えだったとする説（【ShT】14, 【TA】68）の他、「ハレムから外に出したり、外部と往来させたりしないように」との、ホセイン・ハーンからサームを引き離す意図を窺わせる指示が、タフマースブ本人から下されたとする説もある（【Javāher】160, 【KhT】214）⁽⁸⁾。

事前交渉では、「ホセイン・ハーンについてのシャーの御慈悲が増すように取り計らうこと。ホラーサーンよりも良い封土 (olkā') をミールザーと彼と、仲間のアミールたちのために定めること。」（【TA】67）、あるいは、「サーム・ミールザーをホセイン・ハーンから引き離したりしないこと。これまで通り、サームの師傅職は彼に帰属するものとする。」（【IN】109）の各二点について、協約 ('ahd) が交わされていた。したがって、ホセイン・ハーンの側からすれば、行宮

に到達した途端に協約を破棄されたことになる。

彼はすっかり騙されたと思ひ込み、チューハから招かれている翌日の宴席についても陰謀の意図を感じた。シャームルー部は家族集団をすべて同行してきており、ひそかに脱出するという策は非現実的であった。思案の末、彼は先制攻撃を仕掛けることを提案し、味方の兵士 700 人がこれに賛同したという ([IN] 109-10)。

一方、チューハはといえば、サームの身柄をタフマースブに預けた時点で、この件については一段落した気持ちでいた。既にかかなりの年齢で、疲れやすくなっていたため、早々に帰宅し、自らのハレムで休んでいたという。サームから引き離されたホセイン・ハーンの様子を窺わせるべく、腹心たちを偵察に出してはいたものの、彼らに託された伝言とは「お気持ちを楽にして、明日、ソルターンの天幕 (manzel) まで来られたし」などという至って呑気なものだった。だが、派遣された腹心たちはシャームルー部の宿営地が極めて不穏な空気に満ちていることを察知し、訪問を取り止めてすぐに引き返した。そして、チューハにその状況を報告した上で注意を喚起したのだが、なぜか、チューハは全く取り合わなかったという ([TA] 68)。

いずれ何か動きがあるにせよ、今は到着直後であり、また、何といても宮内には自らの勢力下であるという自信があったのだろう。チューハは 2,000 名もの若衆たちを私兵として抱えていたのだが、そういった慢心のため、事件発生時にはそのほとんどを帰宅させてしまっていた ([Javāher] 161, [KhT] 214)。このことが結果的に彼の命取りとなった。

(2) ホセイン・ハーン事件

ホセイン・ハーン率いるシャームルー部の兵士たちが夜襲をかけたのは、6月18日未明(ズー・アルカーダ月3日の夜)の出来事だった ([Javāher] 160, [JA] 285, [KhT] 214)。ヒジュラ暦では日没と共に日付が変わるから、事件はチューハが就寝してから数時間以内に発生したことになる。ちなみに、この事件について Sümer 氏は、タフマースブによる是認や扇動を想定しているのだが、そのような事実はいかなる史料からも確認することはできない⁽⁹⁾。

さて、ホセイン・ハーンによる襲撃の状況については、それが夜襲だったこと、現場が大混乱をきたしていたことから、各史料での説明には一致しない部分も多い。ただ、大体において、戦闘はディーヴァーン・ハーネ (divān-khāne) とハレムを中心に展開されたようである。[Javāher]によれば、シャームルー部が最初に襲撃したのはハレムであり、恐らくはサーム・ミールザーの奪還を目指したものであろうとしている ([Javāher] 161)。彼らに夜襲を決意させたきっかけを考えれば、これが最も合理的な説明といえる。チューハの天幕はそれらからは少々離れた場所に設営されていた模様だが、行宮での騒ぎを聞きつけて、あるいは、敵兵から追われる形でディーヴァーン・ハーネへとやってきた。ほぼ同時にシャー・タフマースブも寝所から駆けつけ、警備

にあたっていた高位の科尔チたちにシャームルー部の撃退を命じると共に、自らもディーヴァーン・ハーネの外に立ち、敵軍に矢を放ちはじめた（【TA】 69）。

しかし、シャームルー部の反乱兵士が放った矢が二本、タフマースプの天幕(bārgāh)に（【KhT】 214）、あるいは、タフマースプの被りもの(tāj)に（【AT】 309, 【TQ】 27）刺さるという状況に至ると、身の危険を感じたシャーは、ハレムの奥へと避難した。また、やや劇化されている感否めないものの、ディーヴァーン・ハーネの中に逃げ込んだチューハ・ソルターンをホセイーン・ハーンがさらに追いかけて、一対一の戦いになったとする記事が、基本史料の多くに載せられている（【JA】 285, 【AT】 309, 【KhT】 214, 【TQ】 27）。

チューハの暗殺はその直後に起きた。シャーの親衛隊である科尔チたちは、シャーの命令に従って敵を撃退すべき立場にあったのだが⁽¹⁰⁾、中にはチューハに対して強い敵意を抱いている者もいた。そういった者の一人が混乱に乗じて彼の下腹部に槍を突き刺し、致命傷を負わせたのだった。その日夜警にあたっていたのはゾルガダル部とシャームルー部の科尔チたちだったが、犯人がシャームルー部出身者だったとするのは【IN】のみで⁽¹¹⁾、その他の史料は、ゾルガダル部出身の科尔チの仕業だったということではほぼ一致している⁽¹²⁾。

重傷を負ったチューハは、側近たちによって一旦ディーヴァーン・ハーネの内奥に運び込まれた。知らせを受けてすぐに駆けつけたタフマースプは、大天幕(khargāh)に連れて行って休ませよう指示している（【TA】 69）。だが、まもなく彼は亡くなってしまった。

朝日が昇り、遅ればせながらタッカー部の援軍が四方から集まり始めると、ホセイーン・ハーンは形勢不利とみて、兵士たちに退却を命じた。この時点でチューハは既に死亡していたのだが、その死は彼の従者たちによって完全に伏せられていたため、シャームルー部の兵士たちはその事に全く気付かなかったという（【JA】 285, 【Javāher】 161, 【TA】 69, 【AT】 309, 【KhT】 214）。

ホセイーン・ハーンはタッカー部の追跡部隊を何とか振り切り、エスファハーンを経てファールス州へと逃れた。だが、逃げ遅れたシャームルー部の兵士たちおよそ 300 人が捕えられ、行宮へ連行された後に処刑された（【AT】 309-10, 【TQ】 28）。彼らの多くが顔だちも姿も美しい若者だったことから、この処遇は他の諸部族から大いに非難される所となった。

ここまでが《タッカー部の禍》の前半部分であり、タフマースプ直々に《ホセイーン・ハーン事件》(vāqe'e-ye Hōseyn Khān) と名付けられている（【ShT】 15）。

IV. 事件後半

(1) シャー・ゴバードによる幻の大アミール就任

混乱の早期収拾を望んだシャー・タフマースプは、この時点で一度、事件の幕引きを試みたらしい⁽¹³⁾。彼は「チューハ・ソルターンの地位」をその長男であるシャー・ゴバード Shāh Qobād

に与え、シャー・ゴバードがそれまで有していた地位はその弟アリー・ベイグ'Alī Beyg に与えた。さらに、両者には「ソルターン」の身分 (semat-e solṭānī) も与えられたという (【ShT】15, 【TA】70)。上記の「チューハ・ソルターンの地位」とは、タッカルー部の部族長の地位だけでなく、大アミールの地位も含まれていた。

だが、タッカルー部による支配体制の継続に他ならないこの人事は、宮廷に伺候している他部族のアミールたちにとって到底受け入れられるものではなかった。また、チューハの子息たちの側にも、「父親よりもさらに百倍も高慢な人物だった」(【TA】70) と評されているように、人物面での問題もあった。実際、彼らは反対者数名を独断で殺害するなど、タフマースプの意向とは正反対へと暴走しはじめた。これにより、他の諸部族、すなわち、オスタージル部、ゾルガダル部、アフシャール部のアミールたちは、必然的に反タッカルー部同盟を結成した⁽¹⁴⁾。そして、タッカルー部と反タッカルー部同盟は、ハマダーン地方所在のサフル・アリー廟 (Emām-zāde-ye Sahl 'Alī) の近郊 (【JA】285, 【AT】310, 【TQ】28)⁽¹⁵⁾ で戦闘状態に入った。

(2) タッカルー部の敗走

既に Savory 氏が指摘している通り、サフル・アリー廟近郊の戦いの最中、タッカルー部に対するタフマースプの態度を一変させる事件が発生していた。タッカルー部の一員だった「ヤーンチーゴリー Yānchī-qolī」(【AT】310)、ないし「ヤーンジーゴリー Yānjī-qolī」(【KhT】214) という名の男が、行宮のドウラトハーネ (doulat-khāne) に乱入し、タフマースプを強引にタッカルー部のもとへ連れて行こうと図ったのである⁽¹⁶⁾。王命によりこの男は斬られたが、この出来事をきっかけに、タフマースプはタッカルー部支持の姿勢を完全に改め、「血迷った、かの部族を殺すよう」命じたという (【AT】310, 【KhT】214)。

大アミールを部族長に戴く彼らとしてみれば、シャーは当然自分たちの味方であるはずで、拉致扱いは心外だったと思われるが、おそらくは、あらかじめシャーの是認を求めたり、事前連絡をするなどの細かい配慮を怠っていたのであろう。迎えにやってきたタッカルー部の軍団に対し、タフマースプの科尔チ軍は矢の雨でもって応えた。

この時点をもって、シャー・ゴバードに対する大アミール任命については、任命の事実そのものが取り消されたい。【TA】によれば、「空位期間として生じた20日間の後、シャーはタッカルー部の民に取り憑いた悪魔の征伐 (rajūm-e shayātīn-e ens-e Takkalū) を是認した」という (【TA】70)。この「悪魔認定」の後、タフマースプはこの部族に対して一切の慈悲を与えなかった (【Javāher】161)。シャーと科尔チ軍の支持を得たことで、反タッカルー部同盟軍の戦意は大いに高揚した。逆に、反乱軍の烙印を押されたタッカルー部軍は戦意を喪失し、大敗を喫してしまった (【JA】285)。

この敗戦により、タッカルー部の有力アミール、例えば、ダッレ・ベイグ・コルチバーシー-Darre Beyg-e Qūrchī-bāshī ([JA] 286, [Javāher] 161, [KhT] 214)⁽¹⁷⁾やエブラーヒーム・ハリーフエ Ebrāhīm Khalife ら数名が捕えられ、処刑された。さらに、同部族のアミールの子弟たちもまた、一人ずつ、あるいは二人ずつ枷で拘束され行宮へと連行された。彼らは「先の《ホセイン・ハーン事件》においてシャームルー部の若い兵士たちに味あわせていたのとまさに同じ目に合わされた」([ShT] 15, [TA] 70) という。

タッカルー部の災難はこれだけでは済まなかった。さらに数日後、同部族の逃亡者や近隣にとどまっていた者たちからなる大集団が、ハマダーン近郊に移動していた行宮に「我々は無罪であります！」などと叫びながら、免罪を期待して投降してきた。だが、その結果は全く予想外なもので、全員が斬首されたという ([TA] 70)。これは前述した「悪魔認定」の影響と考えてよからう。彼らには悪魔が取り憑いていると、他ならぬシャーの宣告があったがゆえに処刑されたのである。タフマースブはこの時点でまだ17歳であったが、[KhT] にもはっきりと記されている通り、「チューハ・ソルターンの殺害後、シャー・タフマースブ (Pādeshāh-e kāmkar) の権力は、より大きくなった」([KhT] 224) のである。

投降をためらっていたタッカルー部の残党は、仲間たちの処刑を知るや、慌ててバグダード方面へと逃走した。コルDESTAーン地方を経由しての困難な逃避行だったらしい ([AT] 310)。今や自分たちを保護してくれそうなのは、同部族出身のバグダード知事モハンマド・ハーンしかいなかった。

(3) ホセイン・ハーンの大アミール就任事情

シャー・タフマースブは、この時点で再び混乱の收拾を図った。後継大アミールの決定が火急の用であった。前述した反タッカルー部同盟は、「一部の兵士はアブドラー・ハーン 'Abd-ollāh Khān (Ostājilū) の許に、殆どの兵士はハムゼ・ソルターン・ゾルガダル Ḥamze Solṭān-e Zū al-Qadar⁽¹⁸⁾の許に結集した」といった状況だった ([Javāher] 161)。前例では戦いの勝者から選ばれていたこと、また、大アミール職は原則として連立制だったことから、上記の二名が大アミールに起用されてしかるべき所だったが、両者のうち実際に任命されたのは、前者のみだった。残るもう一人としてタフマースブが選んだのは、ファールス州ギャルムスイール (Garmsīr) に逃亡していたホセイン・ハーンだった⁽¹⁹⁾。

タフマースブは慈悲の意を明確に示す意味で、使者に賜衣を持たせて彼の所に遣わし、宮廷に連れて来させた。そして、アブドラー・ハーン・オスタージルーとの連立という形で、大アミールに任命した。この両者共にタフマースブと従兄弟の関係にあったという点が注目される ([TA] 71)。この人事に伴って、文官最高位にも異動があった。中央政庁ヴァズィール (vazīr e

dīvān-e a'lā) の前任者は、チューハの側近中の側近であったため、処刑に追い込まれた。後任にはホセイン・ハーンの腹心であるアフマド・ベイグ・ヌールキャマール・エスファハーニー **Aḥmad Beyg-e Nūrkamāl-e Eṣfahānī** が就任した。

新体制が成立したちょうどその頃、アゼルバイジャン州からオラーマ・ソルターン・タッカルーが 7,000 騎の大軍と共に行宮に到着した。彼はチューハ・ソルターンの後任に選ばれることを希望したのだが、到着があまりにも遅すぎた事に加え、宮廷内の空気はまさに反タッカルー部一色だった。彼は失意のうちにアゼルバイジャンへと引き返したが、そこでの不信仰と不従順の一端がシャーに報告されると、他のタッカルー部民と同様に、討伐対象に指定されてしまった。これにより彼はサファヴィー朝領内に居場所を失い、オスマン朝への亡命を余儀なくされた。後にスレイマン大帝のイラン戦役を招くことになる彼の亡命も、《タッカルー部の禍》がもたらした余波の一つだったのである。

(4) ヒジュラ暦 938 年の出来事

新体制が発足した時点で、おそらくヒジュラ暦は 938 年に改まっていたと思われる。《ホセイン・ハーン事件》が発生したズー・アルカーダ月とはヒジュラ暦の第 11 月であるから、事件発生から既に 2 ヶ月が経過していた。《タッカルー部の禍》とは、そのターリーフが意味する 937 年だけでは収まらない長期的な事件だった訳である。

さて、前述したタッカルー部の残党は総勢およそ 1,800 名と伝えられているが ([Javāher] 162, [KhT] 215)、彼らはバグダード到着後も、当地の知事モハンマド・ハーンの命令で市門の外に留め置かれた⁽²⁰⁾。彼らはタフマースブの許から逃げてきたお尋ね者だったからである。

モハンマド・ハーンにとって、彼らの処遇をどうするかは非常に難しい問題だった。親族としてタッカルー部族民を保護する義務があるのは確かだが、同時に、「シャー・タフマースブの下僕たち (= 反タッカルー部同盟) と考えを同じくしていることを表明するため」(benā bar-e ezhāre yek-jehatī-ye nesbat bā bandegān-e Navvāb-e Ḥaẓrat-e a'lā) ([TA] 70) には、反乱分子を肅正する必要もあった。つまり、部族集団の結束を保ちつつ、サファヴィー朝政府に対する忠誠心を示す必要があったのである。結局、反乱の首謀者数名を処刑することで、それ以外の部族民の助命を乞うに決めた。「暴動のパン種」と目されたゴドゥズ・ソルターン **Qodūz Soltān** の他、大アミール就任の願望を抱き続けていた上記のシャー・ゴバードら数名が処刑され ([ShT] 15, [TA] 70, [AT] 310)、彼らの首級はタフマースブの宮廷に送られた⁽²¹⁾。シャーに処遇を委ねる意味で拘束したまま移送された者も何名かいたらしい ([Javāher] 162, [KhT] 215)。こうして、《タッカルー部の禍》はようやく決着したのである。

V. おわりに

以上が《タッカルー部の禍》の概要である。事件の全体像を提示し終えた上で、改めて確認しておきたいのは次の二点である。

一つは、チューハ・ソルターンの暗殺は、明らかにタフマースプの意図しない出来事だったこと。弟のサームをハレムから出さなかったことが事件の原因だったとすれば、タフマースプ本人もシャームルー部側の反発を招いた当事者の一人とみるべきである。彼はコルチ軍にシャームルー部撃退を命じ、自らも応戦している。チューハが負傷するとその容態を気遣っている。彼の死後は、その長子シャー・ゴバードを大アミールに任じている。そこまでは明らかにタッカルー部支持だった。だが、シャー・ゴバードの能力や、チューハを失って以来暴走の止まらないタッカルー部に対して深く失望すると、おもむろに反タッカルー部の姿勢へと転じた。最終的に同部族の優越性を喪失させたのは、タフマースプによる「悪魔認定」だった。これにより、逃亡中に自発的に投降した者も皆殺しにされた。タフマースプの発言にこれほどの重みが生じた前例は確認されていない。したがって、彼の為政者としての実権獲得時期を考える上で、《タッカルー部の禍》は大きな転機として位置付けられるべきだと考える。

もう一つは、ホセイーン・ハーンとシャームルー部は、先制攻撃というただ一点を除けば、他には殆ど何も為しえなかったということ。チューハを殺害したのはゾルガダル部出身のコルチだった。チューハの死も知らぬままファールス州へと逃亡し、事件が終息に至るまでの間、完全に鳴りを潜めていた。タッカルー部を宮廷から追い出したのも、他の諸部族の手柄であった。だが、事件後、ホセイーン・ハーンはなぜか連立大アミールの一人に抜擢された。その真の理由について《タッカルー部の禍》の関連記事から窺い知ることは難しいが、実力を認められての起用でなかったことだけは確実である。

この事件を境に、相対的に大アミールの権威は低下し、タフマースプの権威は向上したと想定すべきだと思うが、事件後の宮廷事情については本稿の考察対象から外れる。サーム・ミールザーとシャームルー部との関係がどうなったのかを含め、本格的な検討は他日を期したいと思う。

註

(1) $6 + 30 + 20 + 400 + 400 + 80 + 1 = 937$.

(2) Savory氏は、西暦1524年から1533年にかけてのサファヴィー朝の政治状況について「キズイルバーシュによる空位時代」と規定しており、今の所これが通説となっている。(Roger M. Savory, “Ṭahmāsp” (Ṭahmāsb), *The Encyclopaedia of Islam, new edition*, vol. X, Leiden, 2000, p.108.)

(3) Faruk Sümer, *Safevi Devletinin Kuruluşu ve Gelişmesinde Anadolu Türklerinin Rolü*, Ankara,

1976. Sümer 氏はこの事件の情報源として、【IN】、【ShT】、【JA】、【AT】といった史料を利用しているが、それらでは到底裏付けられないような分析もなされている。また、部分的な扱いではあるが、Savory, “The Principal Offices of the Şafawid State during the Reign of Tahmāsp I (930-84/1524-76)”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* XXIV, 1961, pp.65-85. もまた、先行研究の一つに挙げることができる。

- (4) Savory 氏によれば、タッカル一部とはアナドル（アナトリア）南部のメンテシェ、アイドゥン、サルハン、ハミト、ゲルミヤンの各地方に出自を置くトルコマン集団の総称であり、上記の地方が総体として「テケイリ」（Tekeili）と呼ばれていたことが部族名の由来だという。サファヴィー朝建国当初からキズイルバーシュの大部族の一つに数えられていたが、917/1511年に起こした大反乱の結果オスマン朝政府から故郷を追われ、さらに1,500名の部族民がサファヴィー朝に移住してきたという。（Savory, “Takkalū (Täkkä-lü)”, *The Encyclopaedia of Islam, new edition, vol. X*, pp.136-37.）
- (5) この人物は、エスマーイール I 世時代にコルフル知事を（【AT】 245, 【KhT】 159, 【TQ】 27）、タフマースプ I 世時代の最初期にエスファハーン知事を歴任していた（【JA】 282, 【TA】 61）。
- (6) モハンマド・ハーンはガーズィー・ハーンの姉妹の一人を妻に迎えるなどして、彼と姻戚を結んでいた【Javāher】 196）。一方、オラーマの方は、アゼルバイジャン州総督就任の頃からチューハと不和になっていたともいわれる（【TA】 71）。
- (7) この時、シャームルー部の兵士たちは鎖かたびらや胴よろいで完全武装していた。そして、あたかも王の凱旋のような華麗さでもって到着し、他部族を圧倒させたという。この事がチューハに報告された時、彼はホセイーン・ハーンに対して強い憤りを覚え、その殺害を決意したのだと幾つかの史料は説明する（【AT】 308, 【KhT】 213, 【TQ】 27）。しかしながら、仮にも王子が帰還するのだから華麗な行列になるのは当然であり、逆に、大アミール自らが出迎えに出ていなかったとする状況説明の方がむしろ不自然なように思われる。
- (8) 後者の説では、サームは召喚のために派遣された使者によってハレムへと導かれたと説明されている。なお、サームをハレムの中に導いてから3、4日を経てもハレムの外に出さなかったなどと説明する史料もあるが（【IN】 109）、実際には、それほど時間を経ないうちに事件は発生している。
- (9) Sümer, *op.cit.*, p.60. なお、Sümer 氏は事件発生の場所についても、ガズヴィーンだったとする誤った説明をしている。
- (10) タフマースプ自身の記録では、「衛所（keshīk）に詰めていたゾルガダル部とシャームルー部のコルチたちは勇敢に戦った」とある（【ShT】 14）。実際、コルチたちの多くはシャーム

ムルー部の撃退に奮闘していたのだろう。

- (11) 【IN】の著者フルシャーは、「チューハ・ソルターンがホセイン・ハーンの手で殺害されたこと」という不適切な題目で、この事件について比較的長い記述をしている（【IN】108-12）。それによると、チューハは「ホセイン・ハーンと共に急襲に加わっていたシャームルー部のコルチたちの手により」殺されたとある。だが、「その出来事の真の状況については何一つ、トルコもタージークも誰一人として知る者はいなかった」などと、情報不足を素直に認めていることに注意しなければならない。少なくとも《タッカルー部の禍》に限っては、【IN】の記事を鵜呑みにすることは避けるべきである。
- (12) ただし、下手人の名前については二説ある。一つは、「メスル Meşr」 という名前のゾルガダル部グルガルー氏族 (Qūrghalū) 出身のコルチとするもの（【JA】285, 【TA】69, 【AT】309）、もう一つは、「キージューク・ユズバーシーの父ガラーゴリー（ガラージェオグル?）・ゾルガダル Qarā-qolī (Qarāje-oghli?) -ye Zū al-Qadar pedar-e Kijūk-e Yuzbāshī」 だったとするもの（【Javāher】161）。【KhT】は両者のうちのどちらか、という賢明な立場をとっている（【KhT】214）。なお、Sümer氏は、シャーからの秘密指令を帯びての犯行だった可能性を指摘しているが、何ら具体的な論拠は示していない。（Sümer, *op.cit.*, p.60.）
- (13) タッカルー部のアミールたちがチューハの長子シャー・ゴバードを彼の代理 (vakīl) に立てて、そのままシャームルー部以外の諸部族に対する戦闘へとなだれ込んでいったかのよう叙述している史料が多い（【JA】285, 【KhT】214, 【TQ】28）。これは事実誤認というよりは、詳しい経緯についての説明を省いているのかもしれない。
- (14) Sümer氏は、この同盟結成においても、その背後にタフマースプの同意ないし激励があったことを想定しているが、単なる個人的見解の域を出るものではない。（Sümer, *op.cit.*, p.60.）
- (15) “Emām-zāde-ye Sahl b. 'Alī” と表記する史料もある（【KhT】214）。これとは別に、「グルメズの隊商宿という宿営地 (Yūrt-e Khān-e Gūrmez)」が戦場となったという説もあるが（【Javāher】161）、別の建造物を目印として同一地点を表現していると考えれば、両者の整合性を図ることは可能である。
- (16) Savory, “The Principal Offices of the Šafawid State during the Reign of Ṭahmāsp I ” p.69. なお、Savory氏はこの事件の犯人の名前を「ヤフヤーオグル Yahyā-oghlu」としている。その典拠は示されていないが、おそらく【AT】のC. N. Seddon氏校訂本によるものと思われる。
- (17) この人物は、有力アミールとして挙げられているにもかかわらず、各史料で名前が一致し

ていない。(ex.「ダダ・ベイグ・コルチバーシー-Dada Beyg-e Qürchī-bāshī」(【AT】310)、
「パルヴァーネ・ベイグ・コルチバーシー-Parvane Beyg-e Qürchī-bāshī」(【ShT】15)、
「ダヴァール・ベイグ・コルチ Davār Beyg-e Qürchī」(【TA】70))このうち、Sümer 氏
は【ShT】の説を採用している。(Sümer, *op.cit.*, p.60.)

- (18) この人物は、ゾルガダル部のチャームシュルー-Chāmshlū 氏族所属で、当時シーラーズ知
事の任にあった。前年度の冬季、サームとホセイン・ハーンはシーラーズで過ごしていた
所から、既にその時点でシャームルー部とゾルガダル部との間に、ある種の協約が結ばれ
ていた可能性も考えられる。
- (19) 【IN】では、ホセイン・ハーンの大アミール就任は反タッカルー部同盟の総意によるもの
だったとしている。そうした上で、タフマースブは彼らからその決定を言上されただけで
あったかのような説明を加えている(【IN】111)。しかしながら、連立大アミールのもう
片方の存在については一切触れていないなど、やはり《タッカルー部の禍》関連記事に限
っては信頼度の低さは否めない。
- (20) その数を実際に数えた人物こそが、【Javāher】著者ブーダーグ・ガズヴィーニーであった。
彼は当時、バグダードのモハンマド・ハーンの許で書記の仕事をしていた。彼は市門の外
で足止めされていたタッカルー部族民の所に行き、人数等の詳細を記録した。彼らには、
食事として大麦入りのホレシュが配給されたが、その割り当てと状況報告は彼の任務だっ
たという(【Javāher】162)。
- (21) Sümer 氏は、モハンマド・ハーンがこの判断について、バグダード知事に抜擢してくれた
かつての庇護者(=チューハ・ソルターン)に対する忘恩であるなどと否定的に記してい
るが、部族の論理に偏した一方的な見解と言わざるをえない。(Sümer, *op.cit.*, pp.60-61.)